

●「健康都市東京」都民公開講座に参加して 「最終目標は受動喫煙防止法の閣議決定」 ～屋根のあるところ・壁の中は禁煙措置が国際水準～

加藤一晴 こともをタバコから守る会・代表



2月にしては底冷えのしない日だった。東京駅からタクシーに乗り込み、乗務員に「イイノホールまで……」と告げた。おそらく霞が関界隈にあるのだろうが、浜松在住の小生には地理的關係は分からない。こういう時にタクシー移動は大変便利だ。

新幹線の中で、しみじみと「医師会主催のタバコ規制に関する講演会は珍しい……」と思った。そして、それがどんな風になるのか見当もつかなかった。

遡ること8年、2008年1月に神奈川県民ホールで、受動喫煙防止条例の県民タウンミーティングが開催された。その時、条例制定に反対するタバコ関係者（小売店・飲食店

業界など）が会場の一部を占めていた。そして、客席から松沢成文前神奈川県知事にヤジを飛ばしていた。このようにタバコ問題は、一筋縄ではいかない抵抗勢力が付きものだ。主催者の東京都医師会も、その辺りの事情は重々承知しての企画だったはず。

メイン会場、そして講師控室

イイノホールは近代的なビルの4階にあった。受付を済ませ会場に入る。そこは満席で600席程度だろうか。まず座席を確保して、講師との面会のため会場外に出た。

関係者が、不審な人物をチェックしていたが、所属と名前を告げると、

あっさり講師控室まで案内してくれたが、そこには旧知の顔ばかりだった。まず尾崎治夫会長に挨拶をし、望月友美子先生、村松弘康先生、来馬明規先生、原田正平先生と握手をした。

かつて望月先生と村松先生、来馬先生は、「こともをタバコから守る会」市民公開フォーラム講師として招聘したことがあった。数名の東京都医師会理事の方々もいらした。聞けば、今回の講演会では、タバコ会社の話題を出さない不文律があるようで、その奇々怪々が続いている。

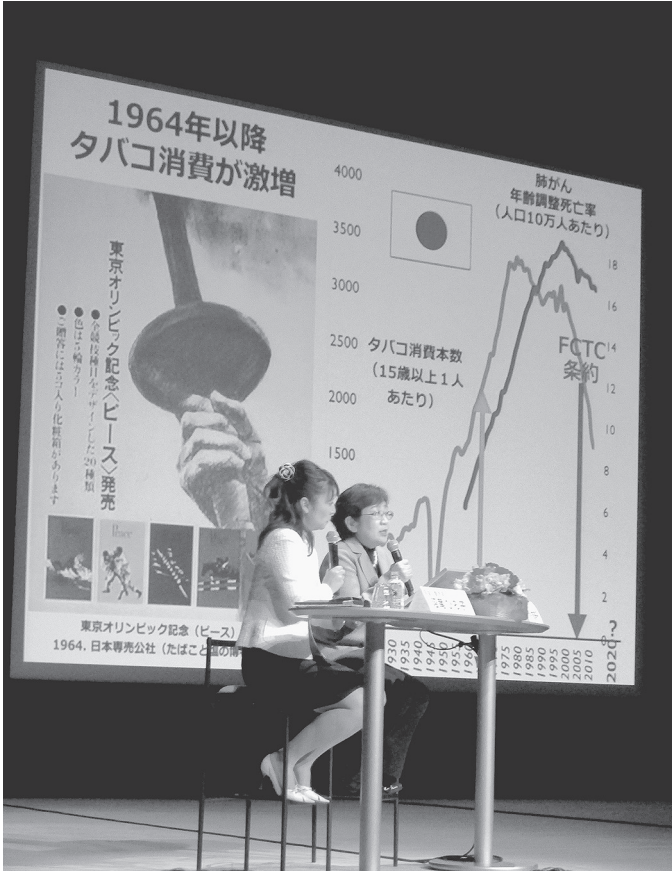
画期的なことは、フェイスブックやツイッターなどのツールを用い

て、多くの情報発信を目論んだことだ。医師会主導で、このようなイベントを開催することは画期的で、ここまで漕ぎつけたという達成感が漂っていた。

尾崎会長の小気味よい挨拶

星の数ほどある医師会の中で、壇上からタバコ問題のメッセージを掲げた医師会長は稀有であろう。各々

の医師会にも温度差があり、場合によっては抵抗勢力も推察されるが、尾崎会長は揺るぎないスタンスを示した。テーマは、「生活習慣における禁煙」だったが、果たして聴衆にその真意は伝わっただろうか。司会の沼尾ひろ子氏は、脳梗塞の既往があり、独自のリハビリ法とメンタルコーチングを成し遂げ、見事に職場復帰した女性だ。



来場者とディスカッションする望月友美子先生 (右)

望月友美子先生講演

第一部の望月友美子講師と論調を合わせたインタラクティブセッションは、スムーズな流れだった。沼尾女史はぐるりと会場を見渡しながら、アップテンポで進行したが、それには秘策があった。会場入り口で青表示「YES…はい」赤表示「NO…いいえ」のリーフレットを配布したのだ。それによって壇上から聴衆の理解度が示されるといふ興味深い現象が見られた。

ステージ上から「YES」か「NO」かを問うと、前席の聴衆は即座に「YES」と掲げたが、後席の聴衆は左右を見渡しながら「NO」を掲げる人が多かった。当然のことながら、タバコ問題に関心の高い都民は前席に座っているが、後席の聴衆はそこまでの知識がない。

望月先生の講演内容は当たり前でも、初めて聞く真実には、自分の知識との乖離に啞然としている。ハトは豆鉄砲を食らうと驚くが、壇上から眺めればアングリしたハトの大群

が視野に入って来たことだろう。つまり、政界・財界やマスコミなどによって真実を知らぬ間に隠蔽され、無関心に仕向けられる姿がここにあった。これが、我が国のタバコ問題を進展させない大きな元凶であろうか。

第2部・パネルディスカッション

パネルディスカッションでは、来馬明規先生、村松弘康先生、原田正平先生による、禁煙ソング披露、ミニレクチャー、小児科医からの提言があった。我々には当然至極のことであり、効率的にタバコ問題の整理が可能だったが、会場後半の聴衆からは、その態度、驚きや「うん」という深い感嘆の吐息が漏れた。やはり、無関心に仕向けられていることの罪深さを改めて理解できた。とにかく知識の無さ、危機感の欠如が尋常でないのだ。

口々に「海外はタバコに厳しいなあ……」の感想が漏れ聞こえて来たが、海外が厳しいのではなく、我が国が遅れさせられているのだ。従来のも吸わせてもてなす因習は

際限なく拡がっている。

このまま国民の意識が変わらなければ、オリンピックにおいての真つ当な喫煙規制など覚束ないだろう。タバコに関しての圧倒的な情報不足は否めない。

喫煙対策は本当に必要か……

世界から周回遅れの喫煙対策でも、国民喫煙率は下がっている。これは、タバコの有害性が理解されつつあることと、受動喫煙の健康被害が知れ渡ってきたことに加え、単一民族なので、他の情報や雰囲気を感じたのだろう。しかし、この場に加え、一部マスコミの論調は、「吸う人と吸わない人の関係」を前面に出し、「マナーの問題」でかわそうとしている。他の先進諸外国が躍りになって規制しようとしているにも拘らず、20%を占める喫煙者擁護スタンスなのだ。

国策として販売しているわけだから、正面切った喫煙規制など到底無理な話である。国会も「受動喫煙防止議員連盟」（会長＝山東昭子元参

舛添都知事に期待するしないのだ。

東京オリンピック・パラリンピックを世界に恥じないイベントにするには、きちんとした喫煙対策を行ない、海外に情報発信するべきだ。一番手っ取り早いのは、舛添知事が都健康局スタッフと共に、東京23区のタウンミーティングを開催することである。都民の肉声を聴くことである。主催者が胸襟を開けば、必ずや本音は聞こえて来る。最近舛添氏は、海外視察を済ませたばかりなので、その実現に向けた行動力が期待される。

施策立案は、執行機関側（東京都）と議決機関側（都議会）の二元代表制なので、条例制定にはコンセンサスを得ることが大切だ。それには都知事が、都議会での党議拘束を外すように働きかける必要がある。都議会議員の矜持に訴えることである。もちろん医療関係者による、都議会会派への喫煙の有害性啓発も続けていく必要がある。

別の視点で行けば、オリンピック・パラリンピックの選手団は、日本全国に滞在することになっているので、政府が「罰則付き受動喫煙防止法」の閣議決定をすればよい。高速道路のサービスエリアやパークキングエリアが一齐に禁煙化しても、利用者は減っていないし、飲食店を含む公共施設は健康増進法第25条の対象である。それに罰則を課せば良いではないか。それに加え国内の葉タバコ耕作者には、「今までご苦労様」と財政支援するような施策展開が望ましい。すでに他の先進国では、いかに喫煙規制をするかが論議され、喫煙存続は政治マター（政治が担うべき事）にはなり得ない。

イノホールを後にして

2月らしく、早めの夕闇が迫ってきた。街を吹く風も冷え込んでいる。足早に帰って行く参加者がどのような感想を持ったか知る由もない。様々な意見もあるだろうが、東京オリンピックにおけるタバコ規制は喫

院副議長）は、女性代議士を委員長に擁し、都民や国民からの追及をかわそうとしている。明らかに、女性代表では突き上げが及び腰になることを熟知している。

世界各国の潮流を見ると、G8（主要国首脳会議）で屋内施設が禁煙でないのは日本だけであり、いわゆる先進国、G20（財務省・中銀総裁会議）の大半を含む全世界44カ国が、すでに屋内禁煙を実現していて、我が国はしんがり（最後尾）と揶揄されている。

ここまで強靱な党利党略が徹底され、党議拘束をチラつかされては、議員諸氏自らの意見など封じ込められてしまう。

神奈川県知事時代の松沢参議は、「健康問題であり党議拘束を外すよう」指示した。今回のイベント冒頭に馳浩文部科学大臣がビデオメッセージで出演したが、「オリンピック・パラリンピックを機会に喫煙を考える」とコメントした。オリンピック主催国の文部科学大臣でさえも、タバコ規制には踏み込

煙者にキツカケを与え、非喫煙者を悪辣な受動喫煙から護る高い人間性の問題である。

海外トップアスリートたちに、時代錯誤の「おもてなし」ではいけない。東京開催が決まり、早や2年が過ぎたが、その間、国立競技場問題、ロゴ偽装問題、聖火台問題など難問山積であるが、このままの喫煙対策では、まるで昭和時代のオリンピックと酷評されるだろう。これまでに継続してきた喫煙対策が頓挫する事実は何としても避けたい。

何時の世にも利権と既得権益は蠢いているが、前回の東京オリンピック以降、国民の感染症罹患率は激減した。今回の東京オリンピックは、国民が正しい知識を獲得し、タバコ問題が終焉を迎えるチャンスになるよう、残りの4年間の関係者の尽力を期待したい。

謝辞：尾崎治夫会長を初めとする東京都医師会関係者に感謝いたします。そして開催余波が都民・国民に拡がって行くことを期待します。